

次世代を担う卓越した 耳鼻咽喉科専門医育成 プログラム

2022年10月22日(土)

ザ・プリンスさくらタワー東京にて開催しました。

■出席者

岡田隆平先生(東京医科歯科大学、腫瘍)
加藤幸宣先生(福井大学 鼻・アレルギー)
栗原 渉先生(東京慈恵会医科大学、耳)
小宗徳孝先生(九州大学、耳・頭蓋底)
柴田博史先生(岐阜大学、腫瘍)
高橋秀聡先生(横浜市立大学、腫瘍)
津田 武先生(大阪大学、鼻)
平野 愛先生(東北大学、喉頭)
熊井琢美先生(旭川医科大学)
鈴木正宣先生(北海道大学)
小山 一先生(東京大学)
細谷 誠先生(慶應義塾大学)
金沢佑治先生(静岡県立総合病院、京都大学)
木戸口正典先生(福井大学)
四宮弘隆先生(神戸大学)

■コーディネーター

藤枝 重治先生
(福井大学医学部長、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教授)
坂下 雅文先生
(福井大学耳鼻咽喉科・医学研究支援センター講師)

■プログラム

研究紹介①：柴田 博史 先生(腫瘍)
研究紹介②：高橋 秀聡 先生(腫瘍)
研究紹介③：津田 武 先生(鼻)

どのように研究を進めていくのか：基礎研究
細谷 誠先生(慶應義塾大学)

臨床研究
金沢佑治先生(静岡県立総合病院、京都大学)

留学
木戸口 正典 先生(福井大学)



■ 日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会

研究紹介①

iPS 技術を用いた発がんメカニズム解明と 頭頸部がん個別化治療の開発

柴田 博史 岐阜大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科 講師

遺伝子発現を調節する仕組みのエピゲノムは発がんにおいて重要であることが示唆されている。しかし遺伝子変異は二次的なエピゲノム変化を誘発するため、エピゲノムの重要性を直接示すことは困難であった。iPS作成技術は、遺伝子変異を伴わず転写因子(山中4因子)の強制発現によりエピゲノムを改変し細胞分化状態を変化させる技術である。発表者はこの技術を用いて発がんに対するエピゲノムの重要性を証明し報告した。

また、頭頸部がんには免疫治療の有効性が示され、最近では個別化免疫治療の適応が期待されている。ネオアンチゲンワクチンはがん遺伝子変異由来抗原を投与し抗原特異的T細胞を増加、活性化させる次世代の個別化治療であるが、どの抗原を用いるかが最も重要な因子の一つである。発表者は、頭頸部がんマウスモデルにおいて、抗がん免疫の中心であるCD8+T細胞に加え、CD4+T細胞を活性化させるエピトープが強い抗がん活性を示すことを証明し報告した。

研究紹介②

頭頸部癌における治療標的の拡大

高橋 秀聡 横浜市立大学附属病院 耳鼻いんこう科 診療講師

私は国内および海外と2回の留学の機会に恵まれた。国際医療福祉大学三田病院頭頸部腫瘍センターでの留学中には、手術の研鑽を積む傍ら、多田雄一郎先生が行っていた唾液腺癌に対するHER2やアンドロゲン受容体を標的とした治療の開発にも参加した(Journal of Clinical Oncology, 2019)。この成果は後にハーセプチン®の唾液腺癌に対する適応拡大につながった。また、米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンターでの留学中にはDr. Jeffrey MyersおよびDr. Carlos CalinのラボでDr. Moran Amitと共に腫瘍神経学についての基礎研究を行った。がん微小環境において、神経が癌細胞との相互作用によって癌の進展を助けるという新しいモデルを提唱した(Nature, 2020)。今後も臨床・基礎両面における研究活動を深化させていきたいと考えている。

研究紹介③

Anti-SEMA4D 抗体を用いた 好酸球性副鼻腔炎の新規治療法開発

津田 武 大阪大学大学院 医学系研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 助教

好酸球性副鼻腔炎(E CRS)は分子病態を理解し適切な治療を選択することが重要と考えられている。われわれがターゲットとするSemaphorinは神経ガイド因子として発見された分子群だが、近年免疫においても重要な働きを担うことが分かった。今回の研究ではSemaphorinのサブクラスの一つであるSemaphorin 4D(SEMA4D)がE CRS患者の血中・鼻茸組織中で増加していることを発見した。このためSEMA4Dが好酸球性副鼻腔炎の増悪に寄与すると考え、病的メカニズムを検証したところSEMA4Dは血管内皮細胞や鼻腔上皮細胞の透過性を亢進し、さらに鼻腔上皮細胞からはIL-6の産生を誘導することで難治性鼻茸形成に寄与することが分かった。またE CRSモデルマウスに対してAnti-SEMA4D抗体を投与することで炎症を抑制することが可能であり、今後E CRSにおける新規治療法になりうると考えている。

SOCIETY Report



命と機能を守る耳鼻咽喉科・頭頸部外科 感覚器のエキスパートを目指して



「耳鼻咽喉科」は内科や外科と異なり、内科的治療から外科的治療まで一貫して行い、全ての世代を一生涯通して診療が行える領域である。

感覚器とコミュニケーションの医学、そして摂食・嚥下、呼吸など生活機能と命を守る診療科でもある。

2021年5月に日本耳鼻咽喉科学会は「日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会」に改称され、

頭頸部領域も専門に診療していることをアピールして活動を行っている。

今回は、昨年実施されている「次世代を担う卓越した耳鼻咽喉科専門医育成プログラム」をレポートする。

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会では、「次世代を担う卓越した耳鼻咽喉科専門医育成プログラム」を、2022年10月22日(土)にザ・プリンスさくらタワー東京で開催しました。

昨今の耳鼻咽喉科では、臨床主体の専門医志向が高まり、大学院入学者が減少し、国際学会での発表や国際誌に掲載される論文数が激減しています。

各大学医局においても医師の働き方改革が進み、研究を行う耳鼻咽喉科医は少数派に転じ、臨床統計や症例での学会発表が急増しています。

そこで、これまで基礎研究を含め素晴らしい活躍をしてきた35歳から40代前半の耳鼻咽喉科医が集い、それぞれが刺激し合い、研究仲間を増やしてもらおうと令和3年から「次世代を担う卓越した耳鼻咽喉科専門医育成プログラム」をスタートしました。昨年は残念ながらコロナ禍の影響により4回のWeb開催しかできませんでしたが、今回の開催では8名が参加し、対面形式で発表と質疑応答を行いました。発表者にはそれぞれの研究への鋭い質問が飛び交い、大変興味深い会となりました。

前回参加したメンバーも議論に混ざり、多岐に渡る追加質問が出されたことで大いに盛り上がりました。参加者の意欲に満ちた研究を通して、それぞれが新しい関係を構築できた実りある会となりました。このプログラムは、今後も継続的に開催していく予定です。



藤枝 重治

Shigeharu Fujieda

日本耳鼻咽喉科
頭頸部外科学会
理事
福井大学
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
教授